

この世の愁い

丹羽 文雄



この世の^{うれ}愁い

著者の了解に
より検印廃止

昭和三十七年三月五日

初版発行

©丹羽文雄一九六二

定価 四三〇円

著 者 丹 羽 文 雄

発行者 東京都文京区音羽町三ノ一九
野 間 省 一

印刷所 東京都文京区大塚坂下町一一四
豊 国 印 刷 株 式 会 社

製本所 東京都新宿区築地町九
大 製 株 式 会 社

発行所 東京都文京区音羽町三ノ一九
株 式 会 社 講 談 社

振替 東京 三九三〇
電話 大塚(四四) 大代表三二二〇

この世の愁い

丹羽文雄



この世の愁い

裝
幀

加
山
又
造

蠟 人 形

七階の窓からみる空は、八月の、煎りつくようなかがやきだった。博多湾も、妙に色をうしなっている。渡船がゆっくりと動いていた。へさきで切られる波が、白くながめられる。室内には、ほどよく冷房がきいていた。食堂の窓よりのテーブルで、五、六人の食事がはじまっている。ていさいだけの衝立で、かれらはほかの客から区別されている。ラジオが鳴っていた。そのテーブルのそばの別のテーブルで、白い服の若い女が、しきりとペンを走らせている。かの女は、男たちの話の中から要点だけをひろっているようであった。ペンを走らせているよりも、男たちの表情をみているときが多い。

笑い声がおこる。すると、かの女も静かに微笑する。たれかの秘書のようであった。ペンを走らせるかの女には、食事をとっている暇はなさそうである。のみのもののコップがそばにあるが、喉をうるおす暇もない風である。

ようやく会食は終わった。それと同時に、話も一応かたがついたらしい。かの女ともうひとりの四十年配の男が、客を送ってロビーに移動した。四十男が、かの女に何かささやいた。かの女は大きくうなずいて、フロントの方へいった。やがて、ひとかかえもある荷物をはこんできた。

「おじゃまでしょうが、お持ちかえりをねがいます」

客のひとりひとりに、荷物をくばってあるいた。みかけよりは軽いものらしい。軽い菓子類でもあろうか。

「車の支度は？」

と、四十男がかの女にきいた。

「はい、表でお待ちしております」

やがて、客はエレベーターのところにあった。かの女が客といっしょに階下におりることになった。かの女が客をそれぞれ車でおくり出しているあいだに、四十男はもとの食堂にもどってきた。

「二人分の支度をたのみます」

と、別のテーブルについた。かの女がもどってきた。ガラスばりの上をあるいてくるようにながめられた。白い服に負けないくらいに白い顔をしている。小さい顔立ちである。骨も細いようである。とおくから、きれいにそろった歯をみせて微笑する。

「ご苦労さん」

と、四十男がやさしく迎えた。かの女は、向かいの席についた。秘書といった感じが消えた。かの女の指に、小さいダイヤが光っている。腕時計も、秘書の階級のものよりははるかに高価らしい。さきほどペンを走らせていたのをみていないひとには、父娘とながめられるだろう。それとも、若い恋人という風に見られたかも知れない。かの女の髪は、軽くウェーブがかかっているが、美容院から出てきたばかりのように一本のみだれもなかった。

「これで福岡のスケジュールは、全部おわった。あとは、ほくらのレクリエーションだけだ」

「ごいっしょにお食事をなさらなかったのですか」

「和が筆記してるのに、ほくがのんきに食べられるかね。あとでいっしょに食べようと思って、ほとんど料理には手をつけなかつた」

たよ」

ホテルでは、べつべつの部屋だった。フロントでは、泉武彦、四十五歳、東京都中央区日本橋茅場町、SY映画商事と書かれていた。門脇和子、十九歳、SY映画商事。

「面白いね、このごろの広告は大体的になっている。屋根というものを無駄にはあそばせておかないのだ」

と、泉が窓の外を指さした。日本家屋の二階建の屋根瓦に、大きく旅館の名がしるされている。電話番号まで書かれていた。

「あるいはいるひとは見えませんわ」

「高層建物に出入するひとを相手にする広告だよ。しかし、おかしいね。ここはホテルだろう。ホテルにとまった人間に日本旅館を広告するのは、大して効果はあがらないだろう。飛行機にのっているひとは、屋根の広告は目には見えない」

「芝のマンモス・テレビ塔にのぼりますと、目の下にいろんな広告があります」

泉は、和子のことばの意味よりも、それを口にしたときの唇の動きにみとれているようであった。形のよい、小さい口に料理が消えていくのが、気のきいた魔術のようであった。

「和は、人形みたいだ。色が白いから蠟人形を思わせる。かざりばえのするひとだよ。和をみていると、いろんな風に着せて、かざってみたくなる。不思議なひとだ。女の子が人形にいろんな衣装をきせてよろこぶように、ぼくは和にきせてやりたいのだよ」そんなことを営業部長の泉がいったことがある。「それでいて、和にはふつうの女のもつ魅力に欠けているのだ。若さではちきれそうだといった感じが、すこしもないのだ。和は、どちらかといえ、植物的な女性だね。清潔で、弱々しくて、いろけというもののからおよそ縁がとおいのだ。黄色の花にたとえるとしても、

温室咲きの洋花の黄色ではない。そこらの庭に咲いている黄色の花ともちがう。山の中で、周囲のみどりにうずまって、ひっそりと咲いている黄色の花だ」

多分に泉の主観的な批評を、それほど和子は重大に考えているわけではなかった。和子はほかの女性と自分が、それほどちがっているとは思っていない。

「若松へいってみよう」

突然、泉がいいだした。

「若松に何がありますの」

「今朝の新聞で、火野葦平の文学碑の除幕式があることを知った。夕方からはじまるが、それにひきつづいて、若松市の河童まつりというのがある。松明行列もある。和には面白いかも知れないよ」

「この暑いのに、松明行列ですの」

「和をせひつれていきたいのだ」

「お伴いたしますわ」

「いや、秘書としてつれていくのではないよ。ぼくの人形として、つれていきたいのだ」

ホテルを一步外にでると、熱気が足首からはいあがってくるようであった。夏服の裾の重さが感じられる。泉がながしをとめた。

「和はちっとも暑そうな顔をしてないが、どういうからだつきだろうね。いつもさっぱりとした顔をしている。汗をかくことがないのではないか」

「いいえ、暑いですわ」と、和子は涼しそうな顔をしていた。

「汗腺がすくないのかも知れないね。子供は大人よりも汗をかかないものだ」

「どうせ私は、いつまで経っても子供ですわ。大人のように發育をしてないのですわ」

「そら、おこった顔は、どうみたって大人の表情じゃないよ。おやつのもらい方がすくないといって、すねている顔だ」

和子が、打つようなまねをする。泉はわれから打たれに、その手をとった。泉は、たのしそうであった。男と女がふざけているといった感じではなくて、父親が娘をからかっている風であった。

博多駅から汽車にのりこむ。

「途中の折尾で下りて、そこから車でいこう」

と、車中で泉がいった。和子は、なじみのない沿線の風景をながめていた。丘の起伏や、苗畑や、建物が珍しいわけではなかった。宗像とか、海老津とか、遠賀という駅名がめずらしいのである。折尾まで、一時間近くかかった。ホームから外に出るまで、和子はひどく古くさい構内をあるいているという気がした。昭和の匂いではなかった。明治の匂いがそのままのこされているような気がする。泉は和子をかばうようにしてあるいた。仕事以外の場合、部長と秘書の位置がわすられていた。

「いちばん大きな車にのろう」

と、駅前に並んでいる車をえらぶのも、泉の役だった。車は、若松市にむかった。

「お客さんも東京から来たのですか」

運転手がきいた。

「そうだよ」

「火野さんの文学碑のためですか」

「いや、ぼくらは見物だ」

「そうですか。おひるの汽車で、火野さんのために折尾で下りた

東京のお客さんを車で送りましたから……」

「文学碑除幕式は、相当にぎやからしいね。新聞に出ていたよ」

「東京からもたくさんひとが来ました。火野さんが生きていたころ、よくこの車で、火野さんのお宅まで送ったことがあります。惜しいひとでしたね」

和子は、火野葦平のものをわずかしか読んでいなかった。戦争ものよりも、火野の河童物語がすきだった。幻想的な雰囲気が、どこか和子の性格に合うせいかも知れなかった。若松市の繁華街で、車をすてた。お茶をのんでいるあいだに、文学碑の除幕式の時間がせまった。

「高塔山には、ロープウェイがある。あるいてのぼるのは、大へんだらう」

泉は、額ぎわのうすい和子を何となくながめていった。ゆたかな髪とはいえない。和子の薄幸をいいあらわしているような気がする。

高塔山にのぼると、目の下に玄海灘がひらけていた。泉は、和子の肩にかかる手をかけた。和子は心もち身をよせるようにした。六連島、彦島、下関市がはるかかなたにあった。そのときどこからか、女の斉唱がきこえてきた。美しい肉声だった。

「除幕式がはじまったらしいね」

そういうえば、頂上のひとびとも除幕式の行なわれる方向へ移動をはじめていた。文学碑は、頂上よりすこし下ったところにあつた。式ははじまっていた。斉唱は火野葦平のためにつくられた歌であり、市の女子高校生二十名あまりで唱われていた。泉と和子は、群衆のうしろに立った。すでに文学碑は、幕をとりのぞかれてあつた。青黒いみかげ石が、二つの赤いみかげ石でささえられ、その土台が白いみかげ石で出来ていた。碑の敷地は、十坪近

くもあるだらうか。みごとな豪華な文学碑であった。碑が鏡のようにみがかれているのが、はなれてながめている泉にもわかる。その上に文字がきざまれていた。が、小さい文字なので、わからぬ。つきつぎに祝辞がのべられたが、東京からきた小説家が、文学碑をふりかえりながら話すのをきいていると、その碑の正面は、

泥によれた背囊に

さす一輪の菊の香や

火野葦平の詩の一節であることがわかった。

「よんだことがある？」

泉がささやくと、

「よんだことがあるような気がしますわ」と、和子が答えた。

「立派な文学碑だ。方々の文学碑もみているが、日本の中には、これほど豪華なのは見あたらないのではないか。この文学碑のためには、二百万円以上はかかっているだらうね」

和子はしんみりとした気持ちになって、除幕式の行事をながめていた。いつか空だけが明るくて、高塔山のすがたが黒くなりかけていた。ふたたび女子高校生の斉唱のうちに式はおわったが、高塔山は夜の中にはいっていった。

「まあ、きれいだわ」

和子が、声をあげた。洞海湾をへだてて、小倉、戸畑、八幡の灯が無数の宝石をちりばめたようにながめられた。宝石の群は、時間が経つにしたがい、いよいよ光りかがやくようであった。こちらが高いせいもあるが、各都市がゆるい傾斜にあり、光りの群が立体的にながめられた。

「とても印象的ですわ」

「和がそんなによろこんでくれるのは、うれしいよ。九州までつれてきた甲斐があった」

泉は細い和子のからだを抱きよせた。

「お母さんに見せてあげたいくらい……」

そのいい方には、姉の周子や、妹の千佳子が除外されているのを泉は痛いように感じる。姉や妹には、和子はみせてやりたくないのだ。肉親をわけへだてする和子。そこに和子の生活がある。

女世帯の門脇家を、泉は一度たずねたことがある。武蔵野市西窪の、戦災をまぬがれた平屋建であった。貸家のように建てられたものだが、自分の家だった。小さい石の門があり、門から玄関まで三メートルもなかった。四ツ目垣があるが、竹のほとんどがくさりかけていた。垣にそった植えこみも、生きていたというのが精いっぱい、枝も葉も萎縮していた。泉はそのとき、風邪で休んでいる和子を見舞いにきた。和子は床についていたが、少女のような顔をしていた。

「十分養生をしてから、出社しなさい。ちっともいそいで出てくる必要はない。君のデスクは、いつもきれいに掃除をしておいてあげるよ」

枕もとにおいた果物籠が、豪華すぎたようである。泉は、ねている和子をなぐさめたかったのだ。しかし、大病院の特別病室にもちこんでもふさわしい果物籠は、この家の家計を皮肉っているようにうつった。そんな気持ちはすこしもなかったのだ。泉は、かえって悪いことをしたと思った。和子は黒目がちな眸を、じつと泉の膝に注いでいた。口を利かなかった。泉は額に手をあててみたが、肉がうすく、いきなり骨に触れているような気がした。

姉の周子も、妹の千佳子も留守だった。母親の勝代が、泉重役をどうあつかってよいか、困っていた。和子が母親似であること

を、泉は知った。父親の生存中は、家作もあり、生活には困らなかつたのだが、女世帯になってから、家作も一軒一軒手ばなしで、現在は自分らがすんでいる家しかのこっていなかつた。姉は、信用組合につとめている。妹の千佳子は、まだ小学生だつた。

泉は、和子の家庭問題には、つとめて触れないことにしていた。相談をかけられる場合は、ともかく、こつちからは触れたくなかつた。一切の家庭のわずらわしさからのがれていきたいのが、泉の性情だつた。それは泉だけのものだつた。折にふれて口にする和子の話を総合してみると、門脇家では姉の周子が、わがままな大将のようであつた。母はことごとく姉をたてた。姉を中心にすることによって、門脇家のバランスがたもたれている風であつた。

「お姉さんたら、お金をいれるといつても、ほんに申し訳みたいで、サラリーの大部分を自分のものにつかつてしまふんですわ」
「それじゃ君が、大部分の生活費をまかなつてくれることになるのか」

「お母さん、お姉さんにはひとことも強いことがいえないうですわ。お姉さんをうちの中でいちばん偉いひとにしてみましたものだから、お姉さんのいいなりになつてゐるより仕方がないんですの」

和子のサラリーは、たかが知れてゐた。サラリー以上の金を、泉はこつそりと和子にわたしてゐた。その金がほとんど生活費にあてがわれてゐた。

「君がよく仕事をしてくれるから、そのご褒美にあげるのだ。これはほくのポケットマネーだよ」

その特別な恩恵に、和子はいまでは慣れっこになつてゐた。が、気持ちの上では半信半疑だつた。

泉の心のおくをのぞいて、何故自分だけが特別にあつかわれるのかと、その謎をとくことは不可能だつた。二十六も年上の男の心はよみかねる。和子は自分に特別な才能があり、ほかの女社員よりも能率をあげているとはすこしも考えてゐない。英文のタイプをうつが、上手とはいへなかつた。和子に仕事ができるのは、泉がそばについてくれるからである。父親のそばで娘が安心して仕事をしているようであつた。SY映画商事でも、泉と和子の関係は、特別なものであつた。そのため和子が同僚から意地悪をされても、仕方はなかつたのだが、たれもが見て見ぬふりをしてゐる。それというのも、SY商事の実権が泉の掌中にあつたからだ。ふたりは、いろいろと噂をされた。が、ふたりの態度はすこしも変わらなかつた。

「恋愛じゃなさそうだ」

「美しい花を、ただ鑑賞してゐるというだけにすぎないのではないか」

「しかし、男と女のあいだからね」

「やましさがあれば、自ずとあらわれるものだが、いつだってふたりは大っぱらにふるまつてゐるよ」

「先夜、泉さんがかの女をつれて銀座裏の婦人装身具店にはいつてゐるところをみかけたよ」

「七丁目の鮎屋で、ふたりといっしょになつたことがある」

「レニングラードの舞踊団がきたとき、あのふたりが長い行列の中にはいつてゐるのをみかけた。顔をあわせても、平気なんだ。君も来てたのかと、泉さんはまるで自分の娘をつれてきてゐるような口ぶりだ。あれじゃうたがいようがない」

「しかし、ふたりで旅行をするからね。男女の仲だ。どういふことから、ふっと、あやまちを犯さないとかがらないんだ」

「泉さんは、相変わらず独身生活だろう」

「わからないひとだよ。仕事となると鬼になるが、一方では、あんなに門脇君を花のように可愛がってるんだ」

「べつに親戚というんじゃあるまい」

「泉さんが六十すぎというのなら、門脇君を可愛がる意味もわかるが、泉さんは四十五歳だ。男ざかりだ。どうにも理解ができないよ。といって、うたがってもいいような材料もない」

「公然と行動されるから、うたがってかかるのは、それだけこちらが卑しいような気がするよ」

社員をあいだでは、いつときそうした噂もさかんであった。

が、疑惑が肯定されるような発見はされなかった。仕事中の泉は、和子をほかの女社員同様につかつた。公私の区別が、泉の中では厳然とつけられているようであった。いつか社員たちは、ふたりを噂にしなくなった。噂をしても、張合いがないことだった。和子を見てみると、なおさら、うたがいのかけようがなかった。和子は上役に大切にされていることを、得意がっていない。泉に対する和子の信頼と尊敬が、つくりごとでなく、ごく自然にひとびとに感じられた。ふたりのあいだには、男女のなれなれしさが感じられなかった。

和子と泉は、ふたたび頂上にもどった。ふりかえると、火野葦平の文学碑は水銀灯の下に、静かに碑面を光らせていた。火野葦平は、古里を愛していた。高塔山に眠ることは、生前のねがいであった。それがかなえられて、火野葦平は永遠のねむりにつくことになったのだ。

「まあ、美しい。松明ですわ。夢の世界ですわ」

和子が指さす下界をながめると、松明の行列がぞくぞく高塔山をめがけてのぼってくるところであった。行列は、えんえんとつ

づいていた。町角にかくれるところもあり、はるか向こうの町からも松明行列が動きだしてくる。何千、何万という松明だろう。街の灯に似た光り方だが、どこかちがっていた。童話じみたかはやきとも形容すべきだろうか。現実にはありえない光りの行列だった。

「暑いということをわすれてしまいますわ」

「うん、美しいね。そばへくれば、十分に暑いだろうが、あの火の行列はとおくで見物していることが、身上だ」

「この山には、河童が祭ってあるんですってね」

「あの美しい松明の行列をながめていると、河童の実在も信じなくなるよ。火野葦平は、河童がほんとうに生きていたと信じていたらしい。もっとも、火野にとっては河童は、かれの文学のよりどころにもなっていたのだからね」

とおくから松明をながめている分には、いつまでも見あきることとはなかったのだが、高塔山が松明の山と変わるころになると、泉と和子は山を下りる気になった。松明がそばによってくると、さすがに暑い。わすれていた肌から、汗がさそい出されるようであった。鯉づめのロープウェイで、ふもとに下りた。高塔山は、童話じみた夢の山に化していた。

自動車で、福岡にかえることにした。福岡にかえる汽車はいくらもあったが、折尾のりかえることを思うと、億劫であった。それに、一時間ぐらいの自動車には慣れていた。東京から車で、箱根や熱海に行くことは毎度のことである。一時間ぐらいのことは、何でもなかった。つとめ先から武蔵野の和子の家まで自動車がかえっても、一時間ばかりなのだ。

福岡にかえっていると、

「酒場をまわるうか。それともラーメンをたべようか」とりあわ

せがおかしかった。

「どちらでも結構ですわ」

「両方ともほしいって顔をしてるね」と、泉が笑った。

まず、酒場に行くことにした。そこは、泉のなじみだった。商売上、客をつれて度々出入している酒場である。ふたりは、カウンターについていた。

「こうしていると、銀座にいいのか、大阪にいいのか、京都にいるのか、わからなくなってしまうよ。ここが福岡ということを、わすれてしまう」

棚には豊富に洋酒がならんでいた。めずらしい年代もののコニャックがある。

和子には、うすくしたジンファイーズがあてがわれた。すこしぐらいは酒がのめなくてはいけないと、泉がいう。ジンファイーズでは酒の内にははいらなかったが、和子にはそれでも十分アルコールをおぼえるのだった。うっすらと目のまわりを、赤くした。つよい洋酒をのんで、いきなり顔中まっ赤にする女は、泉にはありがたくなかった。和子のような酔い方が、だんだんとすくなくなっていくようである。ほのかな、きれいな酔い方である。

二杯目のオンザロックをあけると、泉たちは酒場をでた。マダムが門口にまでおくりにて、ふたりがみえなくなるまで見送っていた。

「秘書だと泉さんおっしゃってましたわ」と、女給がマダムにいった。

「秘書であることには、まちがいはなさそうよ。女のひとの口のきき方が、そうだったわ」

「泉さんが女のひとといっしょにくるなんて、はじめてでしょ」

「銀座の酒場でも、ときどき泉さんに出会うことがあるんだけど、恋人があるなんて一度もきいたことがないわ。趣旨を変えたのかしら」

「ホテルですってね」

「だけど、私には十分信じられない気がするの。男と女をかたんにむすびつけて考えることが、泉さんの場合だけは通用しないような気がするのよ。ずいぶんあの女のひとに気をつかっていたわね。秘書という扱いじゃなかったわ。だけど、それだからそうだと解釈することが、見当がいないような気がするの。泉さんは、あそびなれているわ。だけど、これまで一度も女の噂をきいたことがないの。泉さん独身よ」

泉が酒場の雰囲気だけでは、福岡も、大阪も東京もおなじようだと評したのは適切である。このマダムは、月に一度は東京に行く。いけば、銀座の酒場をあるいた。銀座の酒場の雰囲気を、マダムが九州にもちかえる。

「大ていの男なら、見当はつけられるけど、泉さんだけは特殊らしいわ。うっかりした断言が下せないって感じよ」

泉武彦は、謎につつまれていた。しゃも中そばに在る和子にさえ、泉の正体がよくわからないのだ。和子に理解されることは、泉がふつうの男性のようではないということだけである。背もたかく、眉額が張っていて、意志のつよそうな顔をしている。酒場にいけば人気のあるのは、あたりまえである。泉は誠実な感じをあたえた。何となくたよりたくなるような印象をあたえるのだった。

泉は、街角のラーメン屋に和子を案内した。細長い店のつくりだった。まん中に調理場がある。それをとりまいてカウンターがあった。窓よりいくつもテーブルの席があったが、泉はことさ

らカウンターをえらんだ。目の前の大鍋に、湯がたぎっていた。ガスが青い焰をあげていた。真夏であることも、ここではわすられている風であった。ここではしょつ中夏の気配であった。

目の前で、てきぱきとラーメンとワンタンをいっしょにしたようなものが調理された。わりした、ねぎ、そば、焼肉、醬油のいれ方が、乱暴なくらいである。和子は、おどろいてみている。

「お待ちどうさま」と目の前にはこぼれたどんぶりが、和子の顔の二倍の大きさだった。和子はおそれをなして、箸をとりあげたが、ためらった。泉が笑った。

「八月の、熱い支那そばも、また格別の風味だよ」

小さい口に、五、六筋をいれると、

「おいしい」思わずいった。

「案内した甲斐があったよ」

和子の食欲に、泉は目を細める。おじいさんには小さい孫のすべてが気に入っているような、泉の眼差であった。

「いつか和に、白魚のおどり食いをたべさせようね」

「おどり食いですって？」

「生きている白魚をたべるのだよ」

「私、案外いかもの食いですわ」

「弱々そうで、神経質にみえるが、和は案外図太いところもあるからね。図太いではなくて、向こうみずといった方がいいかも知れない」

和子は、三分の一もどんぶりを減らすことができなかった。

「和には、量が多すぎる。しかし、まわりをみてごらん。和のよくな年配の女のひとでも、おつゆまできれいに片付けてるよ。旺盛な食欲だ。うらやましいだろう」

肉つきが、和子とはまるでちがっていた。かの女たちは、五、

六時間も立ちつづけていることも可能だった。腰が大きく、椅子からはみだしていた。和子はおびえたように、女客をながめやる。

「もつともあのひとたちは、水商売だろう。酒場だね。肉体労働だからね。肉体が資本になっている。和は、頭脳の仕事だろう……」

和子は、姉の周子进行を思い出していた。周子に反発をおぼえるのは、わが家の大将に対する反発だけではなくて、すばらしい肉体美にあった。女学生のはころは、バレーの選手だった。姉がそばにすわると、どたりとした圧迫感をおぼえる。姉は和子のからだつきを憎んでいた。姉は服がよく似合うのだが、和服となると、肉つきがじゃまになった。和服でも洋装でも似合う和子が、姉はにくらしくてならないのだった。

「うらなりさん」

と、姉は軽蔑して和子をよんだ。大きな葉にじゃまされて、陽にあたるのがすくなかった果物は、青白い肌をのこしている。泉には蠟人形を思わせる和子の肌も肉親には軽蔑のたねでしかなかった。

和子は泉と腕をとって、夜更の町をあるいていた。腕をとるようになと泉がいった。あるいて、ホテルにかえった。めいめい鍵をもって、ながい廊下をあるいた。和子の部屋の前にくると、泉がやさしく、

「おやすみ」

と、肩に手をかけた。和子が大きな目で、じつとみつめる。いつものことである。和子は泉の心をよむことができない。部屋にはいつて鍵をかけると、和子は裏切られたように寂しくなった。

隣室の泉の部屋で、湯の音がした。和子もまねて、バスにはい

ることにした。壁を境にして、いつときほとぼる湯の音がつづいた。和子は、浴槽で思いきり足をのぼした。見なれているおのれの肉体については、何の感動もおこらない。少女の手足のようであった。乳房も小さかった。十九歳にふさわしいふくよかな感じは、どこにもなかった。女らしさがわすられているようである。女らしさが身につくには、二、三年の年月が必要であった。

「和子って、女として何の魅力もないわね」

姉は、遠慮なく和子をやつつける。

「私は、お母さんのタイプよ」

「和子は発育不全じゃないの。一度婦人科の先生に、徹底的に診てもらふ必要があるわ」

「どこも悪いところはないわ」

すると、母の勝代が和子のためにいうのだった。

「このごろは、早い女の子で、小学生のころにからだに変調があるというけれど、周子さんは、たしか六年生のおわりごろだったでしょう。和子はおそかったのですよ。女学校にかようなようになってから……。それでも、正確にありましたからね」

「千佳子はまだ子供だけど、すでに女らしくなってるわ。和子は女として何か大切なものをわすれてるんじゃないの。千佳子の乳房をみてごらん。千佳子は、優秀よ」

和子も負けてはいなかった。

「私は、上と下にはさまれて、しょつ中圧迫されてたので、大きくなれなかったの」

「もしも和子のような女性に魅力を感じるとすれば、そういう男は変態ね」

「ひどいわ。これでも私、完全よ。お姉さんのムードがあんまりすばらしいから、私が必要以上に見劣りするだけよ」

和子はバスタオルにはだかくるみ、部屋の中をあるいた。大きな姿見の前で、タオルをほどいた。均整はとれているが、みごととはいえなかった。

——姉の毒舌が、正しいのだろうか。

和子はベッドに上がった。冷房がきいている。風のながれこむ音が、すこしうるさい。和子は、コンプレックスを感じた。両足をばたばたとさせた。腕をあげると、肋骨が数えられた。

——この旅行も、どうやら失敗におわりそうだ。またしても失敗である。私には、泉部長の心がつかめない。

出張をいいつけられると、その度に和子は希望をもった。何かおこりそうな予感で、胸をふくらませた。しかし、いつも失望だった。ホテルのフロントで、二人室しかとってないとわかると、泉はそのホテルをやめた。ときには、二人室をひとりずつ借りた。日本旅館では、襖で境ができれば、泉はそれでよかったのである。夜になると、和子は避けられた。その理由がわからなかった。泉の心を知ろうとする和子の焦燥は、すでに十九歳の域を脱していた。こっそりと、二十七、八歳ほどの心のくぼり方をする。

見合い十四回

デパートの呉服部の一画が、紅白の幕で区切られていた。ほかの売り場とちがい、呉服部にはいつも落ち着いた空気がたどっていた。ひやかしの男女の客がすくないせいもある。女客はゆうゆうと時間をかけて、おのれの欲望とたたかっているのだ。が、紅白の幕の中は、さらに静かであった。招待されたひとだけが、幕の中にはいっていく。

入り口で、招待券をうけとる女店員が待ちかまえていた。秋の新作の展示会であり、デパートはおとくいさまに招待状を出していた。入り口で、勝代が招待券をわたした。門脇貞次郎が死んでから数年になるが、KK急行電鉄の重役の肩書きはいまだに生きていた。西窪の門脇家には、貞次郎の生前同様さまざまだ招待状がまいこんだ。そのときだけは、重役の家庭の気持ちだった。勝代はなす紺色の紗の無地に、水色の帯をしめていた。周子はベチコートですそをはなやかに張らせた、白地に大柄のもようのワンピースである。デパートからの招待をうけるにふさわしい家庭の母娘にみえた。新作の展示会に母娘であらわれるのは、娘の結婚が間近いか、近い将来のための結婚の支度である。会場は、まばらな客だった。女客にかぎられていた。招待券がなくともはいれないわけではなかったのだが、一般の客は受付の女に気おくれがして、中にはいらなかった。会場でゆっくりと新作をみてあるいて

いる女客は、その風彩からおのずと属している階級が想像された。中には、係りの番頭の案内内であるにいてる婦人もあった。勝代と周子は、ひとつずつ丹念にみてあるいた。衣こうにかけられてある訪問着には、何枚も赤札がはられていた。

「いいわね」

と、周子がいった。

「人気があるとみえますね」

「だけど、いやね。自分とおなじ柄のをいく人もきているかと思うと、うんざりするわ。そんなひとと出会ったら、泣きたくなるわね。せつかく高いお金をだして作ったのに……」

招待券をもって、うちを出たときから、ふたりには赤札をはるということば放棄されていた。展示会をみにいこうと母娘で話しかつたときから、買うということばは度外されていた。展示会にくく目的は、別のところにあった。母と娘のあいだでは、そのことがとくに話題にならなかったが、暗黙の内に意志は通じていた。

「でも、そうかたんに勤めを休んでも、かまいませんか」

と、母親が心配した。休んでも展示会にいきなかった。

「いつくびにされたって、かまわない。あんなところに未練はないわ。それより女の一生を左右されることの方が、重大よ」

ふたりはただ、新作の訪問着や、帯などに気をうばわれてあるにいてるというのではなかった。自分らがたれかにながめられてることを、計算にいられた。そのためには、母は娘をひきたてるようにつとめた。からだをくつつけるようにはしていないのだ。周子がどこからもよく見られるように、すこしはなれてついていた。周子は、ファッション・モデルがステージに上がったほどの気持ちだった。

母と娘は、こうした機会を見のがさないようにふだんからつと

原 书 缺 页